



石川 隆子氏

平成7年より国立市民生委員・児童委員として、子どもから高齢の方まで幅広い世代に寄り添い、地域住民の相談に応じながら、関係機関と連携し支援につなぐ活動を行っています。地域の身近な存在として活動を続け、安心して暮らせる地域づくりに努めています。

“変わる時代の中で、 変わらない寄り添いを” 民生委員・児童委員の活動

民生委員・児童委員について教えてください

民生委員・児童委員は、地域に暮らす住民一人ひとりの声に耳を傾け、日常生活の中で生じる様々な悩みや不安に寄り添いながら相談に応じる存在です。

高齢者や子ども、子育て世帯など、支援を必要とする方々と誠意をもって向き合い、状況に応じて行政や福祉・医療・教育などの関係機関へつなぐ、地域と社会を結ぶ大切な「パイプ役」を担っています。

民生委員・児童委員について教えてください

前任の方と私の母が友人であることをきっかけにお願いされましたが、当時42歳でしたので「まだ自分には早いのではないかと」迷いもありました。しかし、現役の方から、民生委員・児童委員の仕事は、特定の世代に限らず、子どもから高齢者まで幅広い世代と地域の中で人と人をつなぐ、やりがいのある仕事であり、また楽しいことも多いので「一緒にやりましょう」とお声がけをいただきました。そうした言葉に背中を押され、「何事もやってみなければ分からない」との思いから、お引き受けしました。

活動している中で意識している事を教えてください

相談者の話をしっかりと聴き、その方の置かれている立場や状況を理解するよう努めています。時には、自分と考え方が違う人もいますが、その方の気持ちを受け止め、少しでも落ち着き、元氣を取り戻すことができるように、行政への「つなぎ役」として担当の方へご案内をしています。

また、国立市社会福祉協議会と一緒に活動では、様々な所属の方とお会いできるチャンスと捉え、積極的に参加しています。

活動を通して印象に残っている事を教えてください

心身の不調を抱える母親とそのご家族が転居されるまでの14年間、継続して見守りをしたことです。転居後も折に触れて「今もどのように過ごされているだろうか」と思うことがあります。近年、心の不調を抱える方が増える一方で、相談できる相手が見つけられず、孤立してしまう方も少なくありません。近隣住民同士をつながりが希薄化する中で、社会全体として、互いを思いやり、受け止め合う余裕が失われつつあるように感じられます。こうした社会的な変化の中で、様々な困難や不安を抱えながら

暮らす方々への理解と支えが、これまで以上に求められます。

その一つとして、認知症についても、その苦しみや不安に目を向け、特別なものとして捉えるのではなく、誰もがなり得る病気のひとつとして理解し、自然に支え合える社会が望まれます。

誰もが安心して暮らせる地域づくりのために、互いに寄り添い支え合える日が一日も早く訪れることを願っています。

今後の民生委員・児童委員について教えてください

仕事を持ちながら活動に携われる方も多いことから、可能な部分については業務の簡素化や効率化を進め、個々の負担を軽減していくことが大切だと考えます。その一方で、時代の流れや社会の変化を柔軟に取り入れながらも、地域に根ざし、一人ひとりの暮らしに寄り添うという民生委員・児童委員本来の役割を大切に、着実に活動を続けていってほしいと思います。

その他、ございましたらお願いします

30年間の活動も振り返るとあつという間に過ぎ去ったと感じています。時間は有限のため、どんどん外へ出て、お仲間づくりを始めてほしいと思います。